

第3章 各地の実践現場から

1. 国境を越えて（鳥取県米子市）

ふれあい囲碁は、「人と人、心と心をつなぐ」活動です。全国各地に実践の輪は広がっていますが、心の形が一人ひとり違うように、実践の様子も、地域によって、また実践者によって様々です。もちろん、共通点はあります。どの実践も、かかわる人々の心が、ぽかぽか温かくなるということです。

どのように温かいものなのか、ごく一部ですが、各地の活動の様子をご紹介します。まずは鳥取県米子市からです。



結婚を決めたOJと美香さん

ナイジェリアから医学を修めるために留学しているOJ(通称オージェー)は、なんとふれあい囲碁きっかけにスピード結婚。喜びのコメントを英語から訳してくださったのは、OJの師匠でもある河合康明さんです。

河合さんは、医師と患者のコミュニケーションを大切に考え、ふれあい囲碁を医学教育に役立てようと、米子市にある鳥取大学医学部で実践されています。



ゲームに引き込まれ、いつの間にか会場全体が温かい空気に包まれます。そんな温かい空気の地域づくりが目標です。

二つの世界の結びつき

まず初めに、神様の愛に、そして私を日本での学生生活にお導き下さった神様に感謝いたします。私は、日本滞在約1年という短い間に結婚に至るなどは、夢にも思いませんでした。

私が妻に出会ったのは、湊山公園で寛いでいる時でした。その数週間前のこととなりますが、私は日南病院で行われた「ふれあい囲碁」に参加しました。偶然にも彼女は日南病院で働いていたのですが、その時には出会いはありませんでした。

彼女との出会い以後、日南病院での「ふれあい囲碁」に参加することは、私の生活に大きな意味を持つようになりました。職場で働く彼女の自然な姿を見ることができ、そしてまた、多くの人々と触れ合う機会を与えられたからです。

今日、皆さんと一緒に在り、皆さんと一緒に楽しんだり、交流できることは私の喜びとするところであり、私と妻は結婚しますが、いつも皆さんのことに想いを馳せています。

「ふれあい囲碁」は、私たち二人に安らぎを与えてくれますし、二人が係わり合い、理解し合うための時と場を提供してくれます。「ふれあい囲碁」が私たち二人の考え、そして二人の世界を結びつけたように、皆さんの役に立つことを願っています。

最後に、私たち二人は、皆さんに「ありがとうございます」と申し上げたいと思います。

EZOMO OJEIRU FELIX (OJ)
(訳 河合康明・鳥取大学医学部教授)

鳥取県日南町では、日南病院を拠点として、地域医療の充実のために、さまざまな工夫を凝らしています。その取り組みを、より効果的にするため、鳥取大学医学部と連携しています。

2006年6月には、河合康明教授の企画によって、地域づくりの担い手を対象に、ふれあい囲碁講習会が開かれました。日南病院長の高見徹さんは、「私たちの取り組みは、あくまで医療が手段であり、目的は地域づくりなのです」と、ふれあい囲碁を活用した地域づくりに共感を示していらっしゃいます。



河合 康明さん

2. 公民協働の先進地で（長野県茅野市）

地域づくり、まちづくりの分野では、市民参加を進めるために「公民協働」という言葉が使われ始めています。このほか、「行政と市民のパートナーシップ」という表現もよく見かけます。

長野県茅野市は、公民協働の先進地として全国から注目を集めています。その茅野市では、2005年度（平成17年度）から、「地域コミュニティの再生」を掲げ、従来より踏み込んだ地域づくりにチャレンジしています。そして、地域づくりの手段の一つとして、ふれあい囲碁を活用しています。



地域社会には、赤ちゃんからお年寄り、障害を持つ人も、外国人も、みないっしょに暮らしています。そしていま、互いに助け合うことが求められています。そのため



には、まず良好な人間関係を築く必要があります。とはいえ、それが簡単にできるなら苦労はありません。特に、まず悩むのは「きっかけづくり」ではないでしょうか。

いきなり「良好な人間関係をつくりましょう」と呼びかけても、地域住民はびっくりしてしまいます。茅野市では、いろいろな人たちに

無理なく参加してもらうことからスタートしました。

初めてのふれあい囲碁体験は、保育園児と近隣に住む高齢者の交流会でした。この様子は、翌日の新聞記事で紹介され、茅野市高齢者クラブ連合会会長の「子供との対戦でも夢中になれる。これは面白いぞ」とのコメントも掲載され、ややもすると一方通行になりがちな世代間交流事業の有効な手法として受け入れられました。

3. まちづくりは人づくりから（山形県遊佐町）

秋田県との県境、鳥海山麓にある山形県遊佐町では、1996年10月から、ふれあい囲碁を活用した人材育成に取り組んでいます。中心となっているメンバーは、まちづくりを担う青年たちです。

「まちづくり」というと、以前は都市計画や交通網整備など、いわゆる“ハード面の整備”というイメージが強い言葉でした。そのなかで、遊佐町は「まちを活性化するのは人であり、人材育成こそまちづくりの基本である」という考え方を基本に置いています。

そして遊佐町では、保育園・幼稚園から小中学校すべて、さらに障害者施設や高齢

者福祉施設、養護学校など、様々な現場に、ふれあい囲碁の前身である“囲碁遊び”を取り入れてきました。遊佐町の実践で特徴的なのは、学校や施設などの中だけで実践するのではなく、施設間交流を積極的に企画・実施してきたことです。



たとえば町立保育園では、近くにある高齢者施設や障害者施設の利用者と定期的に交流をしています。しかも、“囲碁遊び”を交流の手段として中心にすえるのではなく、あくまで“きっかけ”にして、参加者の心がほかほか温まったあと、身体を動かす遊びに移ったり、音楽を楽しんだりしています。

施設間交流によって参加者同士に心地よい距離感（＝安心できる人間関係）が生まれると、心や身体を活性化する効果が見られるようになりました。遊佐町での取り組みと成果は、全国各地の実践者に大いに刺激を与え、コミュニケーション・プログラム開発の機運を盛り上げました。

4. ふれあい囲碁の“原型”（静岡県富士市）

静岡県では、県が積極的にふれあい囲碁の活用を推進していることもあり、県内各地で実践されています。たとえば、虐待を受けて心に傷を負ってしまった子どもたちなどのケアする情緒障害児短期治療施設「県立吉原林間学園」で、心の回復のため



にふれあい囲碁が取り入れられ、話題になりました。

また、2001年10月には、富士市で「ふじカップ」という大きな交流会が開かれました。この大会には、幼児から高齢者、障害を持った人、外国人が全国各地から一堂に集まり、天皇、皇后両陛下も視察されました。お二人ともゲームの輪の中にお入りになって、参加者のみなさんと交流を深められ、マスメディアでも大きく報じられました。

「ふじカップ」は、あらゆる枠を超えて人と人がふれあうことができる、コミュニケーションを図ることが出来るということを証明する画期的な事業となりました。そして、「すべての人が同時に参加できるコミュニケーション・プログラム」は、「ふじカップ」を原型として研究・開発されました。

5. 地域づくりへ（千葉県柏市）

千葉県柏市では、1998年から普及・啓発活動が始まりました。柏市での実践で特徴的なのは、当初から「地域社会に住む不特定多数の関係づくり」を視野に入れていたことです。そのため、地域ボランティアだけでなく、行政職員も積極的に活動に加わって、子ども会の行事や、地域の三世代ふれあい事業、子育て支援や介護予防事業など、様々な人が集まる場所で、積極的にふれあい囲碁による交流（＝人間関係づくり）を重ねてきました。



まだ“囲碁遊び”と呼ばれていた初期の活動では、「参加した人がみな楽しめるように雰囲気盛り上げる」という考え方が中心でした。ところが、各地の実践活動が成熟するにつれ、当初の考え方に変化が訪れました。

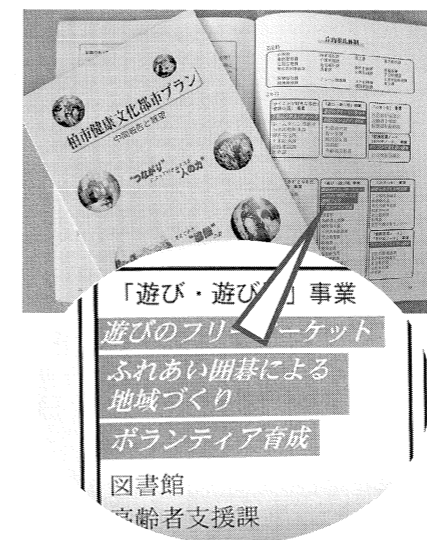
というのは、学校や職場の人間関係に悩んでいたり、子育てで疲れていたり、あるいは親しい人を亡くしたばかりなど、楽しむことよりも、ほっと安心できる時間がほしいという人が少なくないことに気づき始めたからです。そのような気分のときに、無理に楽しむような雰囲気を作ってしまうと、かえって心を傷つけてしまうこともあります。

● 柏市の母子保健事業である「母と子の集い」で初めて行なった時の写真です。“何が始まるんだろう”という緊張した雰囲気の中、初めは自信なさそうに碁石を置いていた母親が、「それでいいんだよ。そのままでもいいんだよ」という温かな空気に包まれたことで、はにかみながらも、徐々に安心した表情に変わっていったのを覚えています。

● 母親同士の狭い人間関係が固定しがちな集いでしたが、ふれあい囲碁を通して自然と和み、自由な空間に変わっていきました。

● 鹿野史子さん（柏市保健師）

そこで、「楽しむ」というより、むしろ「参加者ひとり一人のペースを大切にしながら、安心感を得られるように」との考え方に立ち、他地域の実践者と連携しながらゲームの進行方法やルール説明の仕方、間の取り方など、おもに柏市を実験の地として様々な方法が試されました。そして、2002年にはコミュニケーション・プログラムとしての形式が整い、「ふれあい囲碁」という名前が付けられました。



また柏市では、当初から市の健康づくり事業に“囲碁遊び”が活用されていましたが、“ふれあい囲碁”の開発に伴い、2002年9月には「柏市健康文化都市プラン」のなかに「ふれあい囲碁推進事業」が正式に位置付けられ、ふれあい囲碁を使った地域

づくりを公民協働で進めていくことになりました。一人ひとりを大切に、安心感をもたらす「ふれあい囲碁」は、参加した人の中から新たな実践者が生まれ、連鎖反動的に活動の輪が広がっています。

6. 実践レポート（千葉県柏市/石川県小松市）

ふれあい囲碁との出会いや、これまでの活動のなかで印象深かった出来事などを実践者の方々にまとめていただきました。

実践レポートに共通しているのは、ふれあい囲碁に参加した人々の「変化」です。人と人がふれあうことで、驚くような変化が見られるといいます。活動現場の様子と、実践者の熱いメッセージをご紹介します。



衝撃的なふれあい

増山 明さん

平成17年7月に柏市内のある特別養護老人ホームの入居者とモラロジー研究所主催の研修を行っていた小学生、地域ボランティアのふれあい囲碁交流会に参加しました。

高齢で車イスに乗って思うように身体を動かさない人や認知症の方も多くみうけられたので、理解できるのか半信半疑でしたが、子どもたちがいるので何とかできるかと思いつつ、やはり不安でした。



初めて囲碁リーダーをやることになりましたが、総リーダーから「ゆっくり碁石を渡して様子を見ながら進行してください」と言われたままに進めました。最初は子どもたちがリードして進んで行く感じでしたが、「おじいちゃん、おばあちゃんと協力してやりましょ」と声をかけ、碁石を直接老人に渡してあげると自分で車イスを動かしたり、碁石を置いたりするようになってきて、子どもと老人が一緒になって動いていた。普段、一人では思うように身体を動かすことができないはずの老人が夢中になって動けるのが不思議であった。

最後に、子どもたちとお別れする時に握手をして別れたが、お年寄りの一部の人がうれしくて涙を流していた。これが、「ふれあい囲碁」の効果なのか？衝撃的な出会いとなりました。

次に高齢者施設で実践した時もやはり同じような現象が起き、偶然のいたずらではなかった。科学的証明は難しいが、お互いが「ふれあう」ことで、高齢者は子どもから元気をもらい、子どもは高齢者を労わる心、人間本来のやさしさが自然に生まれてくるものだと実感しました。

また、他の特別養護老人ホームで実践した時に、千葉衛生短期大学の助教授と講師の方が見学に来て、「ふれあい囲碁の効果のうわさは聞いていましたが、実際現場で見て老人が杖なしで歩いて碁石を置く姿をみて感動しました。学校で実践してみたい」との感想をいただきました。

ふれあい囲碁とは、へんに言葉もいらない、ただゲームの中にいるだけでもいい、言葉では表現するのが難しいが実践現場を通してはじめて実感できるものだと確信しています。

最近、親が子を、子が親を傷つける痛ましい事件が多く報道されていますが、ふれあい囲碁を知っていれば、第1歩として、向き合うこと、言葉少なくともコミュニケーションが取れば事件が減るのにつくづく思う毎日です。

また、ふれあい囲碁を実践しながら感じることは、人と人がふれあいを感じながら、どう変化していくかを見ていけるおもしろさもあると実感しています。

参加者の力で創る温かな雰囲気

高木 絹代さん

小学校でのふれあい囲碁の実践について報告いたします。日頃は、仕事（行政の保健師）を通してふれあい囲碁を行っていますが、今回は親として子どもの通う学校で楽しみました。

参加者は、小学校5年生とその保護者、先生です。団体戦で、クラス、男女、親子、先生、ごちゃまぜのチームを編成しました。PTAのクラス委員のお母さんが中心に、準備・運営をしてくれましたが、中心となったお母さんは、初めてのカタばかりでした。私自身は、準備等に協力ができず、皆さん、わからないながらも準備を進めてくれました。



当日は、（驚かれるかもしれませんが）ひと言で書く「めちゃくちゃ」な状態でした。つまり、参加者の皆さんはわけもわからず状態で、騒然としています。ふれあい囲碁の趣旨を最大限に生かそうと、無理に仕切らない作戦だったのですが、本当に騒然としていたので、実は私も「どうしよう…」と内心あせりながら、マイク片手に声を荒らげていました。

ところが、一戦一戦行うごとに、会場の様子が確実に変わってきました。親も子もごちゃ混ぜの皆で、話し合いながら取り組んでいます。みんなで碁石片手に、シートの囲碁盤や仲間の顔や相手チームの顔をうかがいながら、行っています。騒然としている中にも、和気あいあいとした雰囲気となってきました。

それぞれのチームにも特色が出てきました。保護者の方が盛り上がり、呆気にとられている子どものチーム。子どもに教わりながら進んでいるチーム。シートの囲碁盤に皆で座りながら、話をしながら一手一手を決めているチーム。「一勝するまでは、帰れない！」と、気合を入れているチーム。静かに淡々と進んでいるチーム。子どもが大騒ぎして、めちゃくちゃなチーム。各チームごとに、それぞれの特徴、それぞれの交流があり、満足した顔・表情がありました。

交流会を終えて、「ふれあい囲碁」は、やはりすごいなと思いました。どんな状況で始まって、最後は参加者の一人一人のさまざまな力で温かな雰囲気を創る事ができました。数人の強い力で引っ張るのではなく、参加者全員でコミュニケーションを図りながら創った雰囲気です。このようなことを、体感できる人が、一人でも多くなることで、何かが変わると思います。

実践レポート
小松発

「自分さがし」

加藤 征雄さん

会社を定年退職して、はや五年がすぎた。今ちょっとふり返ってみると、ずっと会社人間として仕事一本であったが、どこかで必ず囲碁との関係がつづいていた。

最初は趣味の囲碁として大局観を養いながら仕事に生かしていた様に思う。定年が近づいてきた頃、自分は今後どんな後半人生を歩むべきか、今までの棚卸しをして「自分さがし」をやってみた。会社の延長のままで人間の中が狭く、もっと他分野も経験してみたい、又趣味で生きて自己満足の世界も生き甲斐とはならないと思った。そこで考えたのが物作りの会社仕事から異なった、生きた人間を相手にした分野だった。好きな囲碁を使って、何か人の為になる事がしたいという思いが強く、ある日、NHKのテレビ番組を見て、ふれあい囲碁と出会う事になったわけです。



今、世の中が少しおかしく、いろんな社会問題が発生しています。要因の一つは人間関係の希薄化です。

人と人、心と心をつなぐ必要性が重要視されています。私もふれあい囲碁を通して、いろいろな人とふれあい、その必要性を痛感しています。同類な人とのふれあいから異質な人とのふれあいへ、そしていろんな人との共生が必要です。外国人も仲間です。

先日、ジャパンテント（世界留学生交流）が石川県で行われ、その小松会場でふれあい囲碁を初めて採用して頂きました。国が異なり言葉が多少通じなくても、男も女もホストファミリーも子どももバリアフリーな状態で、楽しくふれあえる事が出来、非常に好評で、良好な人間関係を作る有効な手段としてのふれあい囲碁を認めて頂きました。

わずか数時間のゲームでこんな効果があり、私自身、非常に感動したひとときでした。今後もふれあい囲碁を使って、いろんな人にそれぞれ生きる力を与える事が出来れば、こんなにうれしい事はないと思って、この活動が広がりを持てる様、行政との協力も考えながら続けていきたいと思えます。

ほんとうのきずな

西野 洋子さん

私がふれあい囲碁に出逢い この活動を ぜひ多くの方に体験してもらいたい思いから早6年の月日が経ちました。この活動の体験の中から私が学んだ人との絆について紹介したいと思います。

ある障害者施設での事 ふれあい囲碁の現場で初めてN君に出逢いました。ずいぶん不自由な様子で両手は使えず 声も出せず 車いすの彼がいました。今からいっしょに石取りゲームを始めたいけれど どう説明すれば良いのか 一時とまどいました。とりあえずやってみようか。

でも何から始めていいのか私は不安でいっぱい



でした。9路盤でルール説明したものの解ったのかどうか彼の目はおさまっていません。ゆっくり車いすを押し碁盤の前で話しかけ 「黒石だけどこがいい」「かこめば取れるヨ」彼の顔はむつかしい顔つき 声が出ず汗が吹き出ている様子。沈黙に私のほうが耐えられず声をかけようとした瞬間 彼は右足の靴を脱ぎ 足の指で碁盤をしっかりとおさえたのです。その姿を見て「ここがいいんだネ」。彼は高く高く足をあげ答えてくれました。つられて私も思わず「ゲー」と声を上げ 一緒に片足をあげていました。

何か二人の間の空気がここち良く ゆがんでいた彼の顔が笑顔に変わっていました。「よかった」「出来た」「喜んでくれた」私の中で障碍を持つ人の中では 無理かと思っていたふれあい囲碁がこんな形で進んでいったのです。

身体の不自由な多くの人は 日常生活の中で 自分で何かを決めることが少ない中であって この様に自分の意思で何かを決め 結果が 周りに認められた事は 後々の彼の人生に自信につながったのではないかと感じました。投げかけた心が壁を越えて届き 相手の心を受け取れたことが 私の自信につながった気がします。それからの彼は 囲碁には必ず一番に車いすで私たちを待っていてくれます。素晴らしい道具として 交流の輪が広がっていくよう頑張っています。

この活動を通して障碍を持つ人や子どもたちから素晴らしい人としての絆を教えてもらい 今後もこのふれあい囲碁活動を通して 多くの人に 色々な体験をしていただく事を心から願っています。

